

高校野球指導者のサーバントリーダーシップと 生徒の組織市民行動・組織コミットメントとの関係

スポーツビジネス研究領域

5020A010-1 井村 雄大

研究指導教員:松岡 宏高 教授

【緒言】

経営学の研究において、リーダーシップはこれまで多様に定義されてきた。組織の目的やメンバーによって求められるリーダーシップは変化するため、その定義づけが難しい。例えばプロスポーツの世界では勝利が第一条件となるが、青少年スポーツであれば、勝利に加えて、人間としての成長なども求められる。このように同じスポーツでも、対象や場面によって求められるリーダーシップは大きく異なる。

近年、サーバントリーダーシップ(以下 SLP と略す)に関心が寄せられている。アメリカの AT&T 社を引退した、ロバート・グリーンリーフが提唱したリーダーシップである。SLP は、リーダーがはじめにフォロワーに奉仕したいと考え、リーダーとフォロワーの一対一の関係を重視しながらフォロワーに働きかけるリーダーシップである。また SLP と従属変数の関係についても検討されており、効率的なチームの変数として使用される組織市民行動(以下 OCB と略す)や、そのチームへの愛着を測定する、コミットメントなどの変数と正の相関関係が確認されている。

青少年がスポーツに取り組む環境として位置づけられる高等学校の運動部活動は、文部科学省によって自主的・主体的な活動であるべきとされている。しかし高校野球においては、強豪校への実力ある選手の一極集中が起こり、中には部員が 150 人を超えるチームも見られ、すべての学校において生徒が主体的に活動できる環境が確保されているとは言い難いのが現状である。このような環境において、生徒一人一人を大切に作る指導を考えると、指導者のマネジメントが大変重要であることが明らかである。

そのため本研究においては高校野球のチームマネジメントの課題を念頭において、高校野球版 SLP 尺度を作成することを研究の目的とする。さらには SLP と OCB、コミットメントの変数との関係を確認することを第 2 の目的として設定する。

【先行研究の検討】

これまで SLP は主に3つの尺度が使用されてきた。尺度は Liden(2008)、Sendjaya(2008)、Van(2011)の3つが代表的である。その理由は尺度作成の手続きに則り、適切に尺度が作成されているからである(Eva, 2019)。

また従属変数や媒介変数、調整変数との関係もこれまで多く検討されている。従属変数はフォロワーの行動変数、態度変数に大きく分かれる。行動変数にはチームワークの解明に重要な OCB がある。これは役割外行動とも呼ばれ、チームを効率よく機能させるために自身をどの程度犠牲にしているかを測定する変数である。SLP と OCB の正の相関関係が明らかになっている(Hu, 2011)。

態度変数はチームに対する態度や愛着を測定するものであり、コミットメントが先行研究で多く使用されている。Miao ら(2014)の研究によって SLP がコミットメントに影響を与えることが明らかになった。

【予備調査1】

本研究は適切な手順を踏んで尺度を作成するために、まず SLP のこれまでの研究で使用されている研究を考察し、手順や変数の安定性から Liden(2008)の尺度を選定した。ただこの尺度は会社の従業員を対象に使用する尺度であったため、高校生が理解できる語句、また部活動の内容を表現する尺度に変更する必要があった。

まず Liden(2008)の尺度の7因子の定義をもとに、20 名の高校野球指導者にインタビューを行った。サンプルの抽出に関しては、これまでにリーダーシップやチームマネジメントに関する著書を出版している指導者にインタビューを行い、その指導者に同じような指導をしている指導者を紹介してもらうスノーボールサンプリングを実施した。その結果概念が整理され8因子 32 項目からなる、高校野球版サーバントリーダーシップ尺度が作成された。

【予備調査2】

予備調査1で作成された尺度の妥当性と信頼性の確認、また尺度の語句が高校生に理解できるものであるかを確認するために、高校生を対象にオンライン質問紙を用いて調査を実施した。調査の結果、ある程度尺度の妥当性は確認できたものの、因子や語句に課題が残る結果となった。課題の残った因子の定義やワーディングを再検討し、7因子28項目からなる改訂版尺度が作られた。

【本調査】

予備調査で作成された尺度と、従属変数との関係性を確認するために、高校生を対象にオンライン質問紙を用いて調査を実施した。有効サンプル数は625サンプルであった。AMOSを用いた確認的因子分析の結果、尺度モデルの適合度は $\chi^2/df=2.009$ ($p<.001$)、GFI=.877、CFI=.950、RMSEA=.040であった。GFIは基準値に満たなかったものの、総合的に評価し、モデルがデータに適合していると判断した。AVEは.50-.70を示し、尺度の収束妥当性が確認された。また心の癒しの2項目を除いて尺度の弁別的な妥当性が確認された。これによって概念的な独立が認められたため、その後の分析を行った。

次にSLPの7因子とそれらの影響を受けると予測されるOCBの4因子およびコミットメントとの関係を探るための分析を行なった。まず、各変数間の相関関係を確認したところ、全てのSLP因子と従属変数間において有意な相関関係が認められた。このことは先行研究の結果と一致することから、尺度の信頼性が確認された。

さらに因子ごとの影響力の違いは相関分析では明らかにならないため、学年と選手の立場をコントロールする階層的重回帰分析を実施した。その結果、OCBの第1因子：犠牲的な行動にはコンセプチュアルスキル ($\beta=0.26$, $p<.001$) が有意に影響することが明らかになった。第2因子：効果的コミュニケーションには心の癒し ($\beta=.195$, $p<.01$) が有意に影響することが明らかになった。第3因子：支援行動には、コミュニティへの価値提供 ($\beta=.120$, $p<.05$)、生徒の成長と成功を助ける ($\beta=.120$, $p<.05$) が有意に影響することが明らかになった。第4因子：忠実な行動には倫理的な行動 ($\beta=.311$, $p<.001$) と

コンセプチュアルスキル ($\beta=.262$, $p<.001$) が有意に影響することが明らかになった。最後に部活動へのコミットメントに対してはコミュニティへの価値提供 ($\beta=.137$, $p<.01$)、選手の成長と成功を助ける ($\beta=.184$, $p<.01$)、コンセプチュアルスキル ($\beta=.267$, $p<.001$) の3因子が有意に影響していることが明らかになった。

【考察】

本研究の目的は、高校野球版サーバントリーダーシップ尺度を作成することであった。Liden(2008)の構成因子を大きく変更することなく尺度を作成できた。従属変数との相関関係が有意であったことから信頼性も確認された。SLPとOCB、コミットメントとの階層的重回帰分析の結果、まず部分的にはあるが学年、チームでの立場が影響を与えていることが明らかになった。高校野球は3年間という限られた時間のため、学年が上がると責任感が高まる。またチームへの思い入れが高まるがこの結果から見て取れる。

またサーバントリーダーシップの各因子が従属変数に与える影響は因子によって異なることが確認された。このことからチーム事情等を考慮し、指導者がリーダーシップ行動を見直すことによって、生徒の行動や、チームへの愛着が変化する可能性が示唆された。

【研究の限界】

本研究は高校の野球部の生徒に、生徒が認識している指導者のリーダーシップを測定した。これは必ずしもリーダーシップを測定しているとは言いきれない。それは指導者の意識するリーダーシップと、生徒の認知にギャップがあるからである。そのため今後の研究においては、指導者と生徒の目標の一致などを検討した上で、その後の分析を行う必要があるのではないだろうか。

【主な参考文献】

- Liden, R. C., Wayne, S. J., Zhao, H., & Henderson, D. (2008). Servant leadership: Development of a multidimensional measure and multi-level assessment. *The leadership quarterly*, 19(2), 161-177.